日本文学名著
日汉对照系列丛书

少爷

坊っちゃん

■夏目漱石的代表作，素材取自其本人亲身经历。主人公是一名冒失、憨直且善良的青年教师，在乡村中学任教，遭遇各色人等，或正直未泯，或放纵卑劣，从中反映出日本当时师道众生百态。

夏目漱石 著
傅羽弘 译

吉林大学出版社

书馆

日本文学名著
日汉对照系列丛书

坊っちゃん

少爷

■夏目漱石的代表作，素材取自其本人亲身经历。主人公是一名冒失、憨直且善良的青年教师，在乡村中学任教，遭遇各色人等，或正直未泯，或放纵卑劣，从中反映出日本当时师道众生百态。

夏目漱石 著
傅羽弘 译

吉林大学出版社

图书在版编目（CIP）数据

少爷/（日）夏目漱石著；傅羽弘译.—长春：吉林大学出版社，2009.2
（日本文学名著日汉对照系列丛书）
ISBN 978-7-5601-4034-6

Ⅰ.少… Ⅱ.①夏…②傅… Ⅲ.①日语-汉语-对照读物②长篇小说-日本-现代 Ⅳ.H369.4：I

中国版本图书馆CIP数据核字（2008）第201934号

日本文学名著日汉对照系列丛书

少　爷

◎作者　夏目漱石
◎译　傅羽弘
◎责任编辑　刘冠宏
◎责任校对　刘冠宏
◎封面设计　张沭沉
◎版式设计　林　宁　王阿娜　张　鑫　孙明晓　王　鑫　贾　萍　李　雪　王　汐
◎出版发行　吉林大学出版社
◎社址　长春市明德路421号
◎邮编　130021
◎发行部电话　0431—88499826
◎网址　http://www.jlup.com.cn
◎E-mail　jlup@mail.jlu.edu.cn
◎印刷　长春市华艺印刷有限公司

版权所有　翻印必究

150mm×230mm　16开　15.125印张　183千字
2009年02月第1版　2009年02月第1次印刷
ISBN 978—7—5601—4034—6
定价：22.00 元

出版者的话

语言是为交流而生的。原始的人们，必是由于郁郁乎有感于心，岌岌乎有危及身，手舞之足蹈之而不达其意，便佐之以喉舌了。至于那有感于心的是爱是恨，有危及身的是兽是敌，我辈几万年后恐怕难以妄加猜测。总之，咿呀呼喝，渐成定式。以警以劝，极得其便；以歌以咏，曲尽其情。这便是今人所说的语言了。

而就古人的交流范围而言，不过是一个部族。因此，语言自诞生之初便是因部族而异的。至今，中国的少数民族地区仍然存在着隔山不同语过河非乡音的情形。此后，私财积，政权生，征伐起，海内一。于是，王权下的语言在不同部族间渐渐统一融合，语言的差异便主要体现在国家之间了。由于语言的不解，异邦之间感觉神秘，[illegible]由无知而仇视。

解除外国人在本土人眼里的神秘、误解，当然需要交流。学语言，是交流所需。而学语言的过程本身，也是交流。最简单的问候语，往往是一国风土人情的缩影。名家的小说文章，则是欣赏美文和解读社会的阶梯。

日本与中国不过一苇可航之遥，文化交流源远流长。吉林大学是中国名校，日语教育素建伟勋。此次由吉林大学出版社组织出版的日本名著日汉对照系列丛书，既立意于促进日语学习，又便于大众欣赏日本名家美文，其意义深远。

本丛书选译了田山花袋的《棉被》，泉镜花的《高野圣僧》《歌行灯》，樋口一叶的《浊流》《十三夜》《青梅竹马》，岛崎藤村的《破戒》，森鸥外的《舞女》《山椒大夫》《高濑舟》，夏目漱石的《我是猫》《少爷》，芥川龙之介的

《罗生门》《鼻子》《山芋粥》《蜘蛛丝》《地狱图》《河童》，梶井基次郎的《柠檬》《有城楼的市镇》《冬天》《冬天的苍蝇》《崖上的情绪》，横光利一的《蝇》《太阳》《头与腹》，堀辰雄的《起风》，川端康成的《伊豆舞女》《雪国》，大江健三郎的《万延元年的足球》等，都是日本自明治到现代有代表性的作家作品。

这些作家作品在创作思想上移风易俗，在表现技法上不乏创新。因而，有的语言表述悖于常规，有的用词艰涩语意叠积，有的意境微妙难以言传，给对译工作增加了不少难度。译者虽尽心努力，但水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

吉林大学出版社

2008年10月

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

序 言

夏目漱石（1867—1916年），本名金之助，是日本著名小说家、评论家。代表作有《我是猫》（『吾輩は猫である』，1905年）、《少爷》（『坊っちやん』，1906年）、《心》（『こころ』，1914年）等，有“国民大作家”的美誉。

夏目漱石出生于江户幕府解体后混乱时期的没落地主之家，幼年多有磨难。1889年，受同窗正冈子规影响，从正冈处转让了“漱石”笔名。1890年，夏目进入东京大学英文科学习。1893年大学毕业，先在东京高等师范学校，后辗转至熊本县第五高等学校任职。1900年，留学英国。1903年归国后在东京大学任讲师。1905年，夏目漱石发表《我是猫》，大受好评。1906年，发表《少爷》、《草枕》。1907年，他进入朝日新闻社，走上职业作家道路。此后，发表了《虞美人草》、《三四郎》等作品。1910年，因胃溃疡大吐血，几乎病亡。1914年，发表了《心》。1916年，在执笔《明暗》中病故。夏目漱石在日本家喻户晓，其肖像被1984—2004年间的日本一千日元纸币采为头像图案。

《少爷》是夏目漱石的代表性作品之一，素材取自其本人离京去外地任教的经历。主人公是一名冒失、憨直且正义感未泯的青年教师，在四国一所乡村中学任数学教师。作品的时代背景为倡导“文明开化”的社会转型期，旧传统被打破，新观念未确立，各色人等粉墨登场，或正直未泯，或放纵卑劣，小说语言幽默，描写夸张滑稽，人物个性鲜明，勾画出彼时教育界人物的众生脸谱，充分展现了作者批判现实主义的风格。

小说旧译名为《哥儿》，最早出现于1932年，而后有《少爷》译名。译者认为，“哥儿”一词老旧陈腐，已成当今语言中的死亡词汇，故采用“少爷”的译法，与主人公身份贴切相符。关于其他人物名称的翻译，译者认为某些旧译本中将“山嵐”译为“豪猪”是极不贴切的。在日本词典《广辞苑》中，“山嵐”与“豪猪（山荒らし）”只是发音相同的两个词条，而文中为表现该人物雷厉风行的性格，故称为“山嵐”，因而译为“山风”较为妥贴；“野太鼓”意为帮闲之人，文中取意该人对教导主任的阿谀奉承，如译为“小丑”则意趣甚远，故译为“跟屁虫”；关于少爷家女佣“清”的称呼，以往有的译本译为“阿清”，如此令读者不知其年龄。而根据文中信息，少爷称其为“婆さん”，因此译为“阿清婆”似更准确。

由于时间和水平所限，文中错误在所难免，敬请读者批判指正。

译者

2008年10月于长春

目录 | 少爷 SHAOYE

一……2
二……22
三……38
四……54
五……74
六……94
七……120
八……146
九……166
十……188
十一……210

一

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰って奇麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受け合った。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があって、真中に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱

一

因秉承了父母的遗传，我自幼行事鲁莽，尽干一些赔本儿的事情。上小学时，一次我从学校的二楼跳下，结果挫伤了腰，足足休了一个礼拜。您或许奇怪我为何做出这荒唐之举，说来也没什么大不了的。我从新楼的二层刚探出身子，一名同学就冲着我调侃道："别在那里耀武扬威的，有本事就跳下来，胆小鬼！"当校工将我背回家时，父亲怒目圆睁地训斥道："哪有这样的混蛋！竟然从二楼跳下来，还伤了腰？"我回敬道："等着瞧吧，下次再跳，绝不伤腰。"

还有一次，亲戚给了我一把西洋造的小刀。当我举刀迎着阳光炫耀漂亮刀锋给同学们看时，一个同学却说："亮倒是够亮的，不见得快哟。""凭什么说不快？我可以割任何东西给你看！"我反驳道。"那就割你的手指！""不就是割手指吗？"我顺着右手拇指指背斜着割了下去。幸亏刀子很小，加之我的拇指骨头还算过硬，至今它还长在我手上，但伤疤是终生难消了。

由校园向东走20步，有一块很小的菜地，中间长着一棵栗树。我对这栗子惜之如命。当果实成熟时，便早早起来，穿过后门去捡落下的栗子带回学校享用。

菜地的西侧有一家叫做"山城屋"的当铺，院落正与菜地相连。当铺家有一个十三四岁的儿子，名字叫勘太郎。勘太郎本是一个胆小如鼠的家伙，竟然也每每翻过竹篱笆来偷栗子。一天傍晚，我躲在折叠门后，终于将其抓获。当时勘太郎见无路可逃，索性拼命向我扑

虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こっちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべって、おれの袷の袖の中にはいった。邪魔になって手が使えぬから、無暗に手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがって袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足搦をかけて向うへ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫びに行ったついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取ったら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。古川の持っている田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲にみずがかかる仕掛であった。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなったのを見届けて、うちへ帰って飯を食っていたら、古川が真赤になって怒鳴り込んで来た。たしか罰金を出して済んだようである。

おやじはちっともおれを可愛がってくれなかった。母は兄ばかり贔屓にしていた。この兄はやに色が白くって、芝居の真似をして女形になるのが好きだった。おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへっついの角で肋骨

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

来。他年纪大我两三岁，虽然胆量有限，但力气不小。斗大的脑袋直向我的怀里顶撞，结果一时顶偏，竟钻进我夹袄的袖子里，一时无法还手，于是我干脆用力摇晃，勘太郎的大脑袋左摇右摆，痛苦不堪之下在袖筒里咬住了我的胳膊。钻心的疼痛促使我将他推向篱笆墙，同时使了一个脚绊，将他掀翻到自家的院子里。山城屋的地势比菜地低六尺有余，勘太郎压倒半截篱笆，“哏”地一声摔了一个倒栽葱。他跌落的同时，也撕掉了我的袄袖，我的手臂瞬间获得了解放。当晚，老娘去山城屋赔礼道歉，顺便取回了那截袖子。

诸如此类惹事生非的勾当干了不少。我还带领木匠的儿子兼公和酒店家的阿角捣毁了茂作家的胡萝卜地。当时，胡萝卜的嫩芽尚未出齐，我们在地上铺上稻草，3人玩了半天的相扑，将胡萝卜践踏殆尽。而后又填埋了古川家田里的水井，惹的人家上门告状。本来古川家是用打通节子的粗毛竹作水管，从深井中汲水来浇灌稻田的。可是我们不知道那是什么装置，便把石头和木棍一股脑扔到井里，直到它不出水为止。待我们各回各家正吃饭的当口儿，古川涨红着脸，一路骂着告上门来。最后是家里赔钱了事。

于是我落得爹不疼，娘不爱的田地。老娘总是偏向我哥哥。哥哥长得一副白净面皮，喜欢模仿戏剧里的旦角儿。每看到我，老爹就说：“你这小子不成器哟！”老娘说：“整天胡闹，将来你可咋办？”的确，我果然是不成器，老娘的担心也有道理，只是我还没有沦落到犯罪的地步而已。

老娘病死前两三天，我在厨房玩儿空翻，将肋骨撞在灶台的角上，痛得死去活来。老娘见状，怒不可遏，

を撲って大いに痛かった。母が大層怒って、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊りに行っていた。するととうとう死んだと云う報知が来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかったと思って帰って来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おっかさんが早く死んだんだと云った。口惜しかったから、兄の横っ面を張って大変叱られた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮していた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあったもんだ。兄は実業家になるとか云ってしきりに英語を勉強していた。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をしていた。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清という下女が、泣きながらおやじに詫まって、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえってこの清と云う下女に気の毒であった。この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——このおれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていたか

放出狠话："这辈子再也不想看到你了！"于是把我送到亲戚家里去住，不想竟传来老娘的死讯。我没有想到她老人家会走得这样快，回到家里暗自愧悔：早知老娘病重如此，真不该那样犯浑。而此时我那个哥哥却一连声地埋怨我："你这个不孝的东西，都怪你咱娘才死得那么早！"他的鼓噪令我怒从心头起，举手给他一记耳光。结果自然是又遭到老爹一通训斥。

老娘死了，剩下我们爷仨过活。老爹又啥也干不来，只会逢人便念叨："你小子完蛋，完蛋哟。"究竟是怎么"完蛋"，我始终没弄明白，老爷子真是怪里怪气。近来，我哥哥说起想当实业家，开始嘟嘟囔囔地学起英语来。原本就女里女气的，又一肚子花花肠子，因此我和他关系不好，基本上10天打一架。一次，我们下象棋，他使出磨棋的卑鄙伎俩，待我恼火起来他又冷嘲热讽。我气愤不过，用手中的飞车①砸向他的眉间，顿时见血。于是哥哥找老爹告状，老爹竟扬言要将我逐出家门。

当时我觉得事已至此，别无他法，索性离开这个家。可是，在我家当了10年女佣的阿清婆一再哭哭啼啼地央求，终于使老爹消了气。即便如此我也从未觉得老爷子有什么可怕，反倒替阿清婆感到委屈。听说女佣阿清婆的家在幕府时代原本也是说得过去的，随着幕府的瓦解而败落了，最终落得当下人的地步。不知何故，阿清婆对我是非常宠爱。

母亲去世前3天对我已是厌恶至极，老爹更是提起我就打怵，街上的人们也指指点点地说我是胡打乱作的浑小子。可是阿清婆却始终对我宠爱有加。我本人心知肚明自己这样的性格令人讨厌，于是也不在乎别人把我

①日本象棋的棋子之一。

ら、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真っ直でよいご気性だ」と賞める事が時々あった。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思った。清がこんな事を云う度におれはお世辞はいだと答えるのが常であった。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云っては、嬉しそうにおれの顔を眺めている。自分の力でおれを製造して誇ってるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃せばいいのにと思った。気の毒だと思った。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣いで金鍔や紅梅焼を買ってくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼饂飩さえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももらった。鉛筆も貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持って来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云ってくれたんだ。おれは無論入らないと云ったが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行ったら、すぽりと後架の中へ落してしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捜して来て、取って上げますと云った。しばらくすると井戸端でざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたのを水で洗っていた。それから口をあけて壱円札を改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいでみて

当成枯木朽株看待，可是对阿清婆如此宠我反而感到不解。每每当厨房里没人，阿清婆总是夸我："少爷，你为人直爽，真是好秉性。"

可是我却不明白阿清婆的意思。如果我这样算是好秉性，那么其他人起码也应该对我和善一些才对。因此每当阿清婆这样说，我便劝她不必如此宽慰我。她反而面带微笑看着我的脸，夸赞的愈发起劲，仿佛是她造就了我并引以自豪，这却让我觉得很不自在。

母亲死后，阿清婆便格外疼我。我很孩子气地想，何必这样疼我？用得着吗？简直是多此一举，同时也觉得她这样怪没劲的。即便如此，阿清婆还是经常用零花钱给我买豆沙饼和红梅鲜贝。在寒冷的夜晚，她悄悄备好荞麦粉儿，当我察觉的时候荞麦汤面已经放在我的枕边，有时甚至还给我买砂锅面。不仅是吃的，还给我鞋袜、铅笔、笔记本等等。再后来还借给我3元钱。那不是我开口要的，是阿清婆来到我房间，说："手头没钱不方便，拿去花吧。"

我当然不能接受她的钱，可是她硬是塞给我，推搡半天，最后只好收下。其实我是很想要钱的，于是将3元钱放到钱袋里，再将钱袋揣到怀里。结果上厕所时不小心把钱袋掉到了便池里，无奈之下我只好悻悻地回到房间，把事情一五一十地对阿清婆说明。阿清婆立刻取来竹竿说："我去捞。"

不久就听到井边传来哗哗的水声，我出门一看，只见阿清婆用竹竿挑着钱袋的带子在用水冲洗。当打开钱袋取出里边的1元纸币，发现已经染成茶色，图案也模糊了。阿清婆将纸币在火炉上烘干后交给我。我拿过来一闻，纸币散发着臭气，阿清婆见此情景便说："我去

臭いやと云ったら、それじゃお出しなさい、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持って来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったぎり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云って人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したものでお兄様はお父様が買ってお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固だけれども、そんな依怙贔屓はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。贔負目は恐ろしいものだ。清はおれをもって将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢っては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌いなひとはきっと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了見もなかった。しかし清がなるなると云うものだから、やっぱり何かに成れるんだろうと思っていた。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車へ乗って、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ないと云った。

それから清はおれがうちでも持って独立したら、一所になる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはして

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com